

2 0 2 2 年 度

香川大学経済学部編入学試験

問 題 用 紙

小論文

6ページ

【注意事項】

1. 監督者の「始め」という指示があるまで、問題用紙を開かないこと。
2. 「始め」の合図と同時に、すべての解答用紙に受験番号を書くこと。
3. 落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合は、黙って手を上げて、監督者の指示を受けること。
4. 問題の内容についての質問には応じないが、その他の用事があるときは、黙って手を上げて、監督者の指示を受けること。
5. 解答は、解答用紙に横書きで記入すること。
6. 解答を訂正する場合は、きれいに消してから記入すること。
7. 解答用紙及び下書き用紙は、片面のみを使用すること。
8. 解答を書き終えた者は、黙って手を上げて、監督者の指示を受け、退室することができる。



次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

アダム・スミスは、人間にはその本性上、「あるものを（自分の利益のために）他のものと取引し、交易し、交換する性向」があると語り、この交換性向があるために局地的市場、分業が生まれ、やがてスミスのいう「商業」社会、すなわち市場社会が展開されると説いた。

①このような単線的な市場の発展は、実際の人類史を正しく要約したものなのだろうか。

日本における未開社会の交易の例として、しばしば黒曜石の例が挙げられる。黒曜石といふのは火山岩の一種で、狩猟用の矢じりや槍の穂先などの尖頭器として、あるいはハンマーやナイフなどに使われたことが知られている。非常に有用であるが、また中には非常に美しい光沢を放つものもある。このような黒曜石は、同時に産地が限られている鉱物でもある。なかでも伊豆諸島の神津島は黒曜石の原産地として知られ、この神津島産黒曜石が、神奈川、山梨、長野などの本州の旧石器時代の遺跡から発見されており、中には後期旧石器時代初頭の三万年以前と想定されるものもあるという。このように海を越えて交易されたと考えられる黒曜石を、スミスがいう人間の交換性向のあらわれと考えてよいのだろうか。

どうやら、簡単にイエスというわけにはいかないようだ。直接黒曜石について語ることはできないが、同様な未開社会における交易の例として、文化人類学者であるブロニスロー・マリノフスキーが示した「クラ交易」を紹介しよう。マリノフスキーによれば、西太平洋上に大きく円環状に点在するトロブリアンド諸島を、一つはムワリと呼ばれる腕輪、もう一つはソウラヴァと呼ばれる首飾りが、贈り物として、それぞれが逆回りに島から島へゆっくりと移動する。この贈与の連鎖はクラと呼ばれるが、これは島民たちにとって非常に重要な儀式であり、そこで使用される腕輪や首飾りは、普段は孤立しているようにみえる氏族共同体間の社会的なきずなを具現化したものとなる。カヌー船団を組み、死を賭して贈り物を届けるために海を渡ってきた別の島の男たちを、彼らが到着した島の住民はお祭り騒ぎで歓迎するのである。同時にマリノフスキーは、このクラに付随して行われるギムワリと呼ばれる有用物（ヤム芋や魚など）の取引にも注目する。この実用品の取引では、値引きのための駆引きや折衝（ヒグリング・アンド・ハグリング）があり、厳密な等価性が追及されるという。つまりギムワリは、市場取引といえるような交換である。黒曜石が、クラ交易における贈り物として交換されていたのか、あるいはギムワリにおける実用品として交換されていたのかはわからないが、前者と後者とではその社会的機能に大きな差があるといわねばならない。実のところマリノフスキーもその一人であるが、マルセル・モース以来多くの人類学者が、いわゆる未開社会が、クラ交易のような贈与交換による互酬性の原理によって構成されていたことを指摘している。ただし、贈与交換が支配的であったからといって、未開社会が友愛に満ちた共同体の集合であったと勘違いしてはならない。例えばクロード・レヴィ=ストロース（※1）は、共同体間で贈与のやり取りが折り合わない場合には、たちまち戦争へと移行することになったと指摘している。

こうして、必要物の調達という意味での経済的な交換について、私たちになじみの自己利益追求型市場交換のほかに、贈与交換という別のタイプの交換の存在が確認される。これら二つのタイプの交換に加え、経済人類学者カール・ポラニーは、再分配という別な方法があることを指摘した。再分配は、国家の誕生と密接に関連している。すなわちそれは、国家が行う国民からの財の一時的収奪とその還元という方法である。具体的には、租税の徴収とその再分配を考えればよい。マックス・ウェーバー（※2）は、国家の必須条件を「正当な」物理的暴力行使の独占であると述べた。この場合、ウェーバーは近代国家を念頭においていたのだが、これは古代以来の諸国家に通時的に適用することが可能だろう。ただし、国家の属性がこの定義のようなむき出しの暴力あるいは収奪だけであるとしたら、国家という制度が長続きするはずはない。国家は、自身による収奪（例えば租税徴収）を認める者を保護し、安全を提供することによって自身の存在を安定的なものとする。すなわち再配分という制度の本質は、支配と保護の交換であるといえるだろう。

こうして、生きていく上で必要な有用物を確保する「経済」活動を、互酬、再分配、交換（この場合には、市場交換といふいわば狭義の交換）という三種類の原理で説明できることが示される。これらの仕組みが機能する場所は、それぞれ共同体、国家、市場である。すると私たちはここからすぐに、互酬が優勢であった未開時代、再分配が優勢であった中間時代、そして（狭義の）交換が優勢となった近現代という具合に、これらの制度を発展段階として図式的に考えたくなる。実際、市場交換が行き渡った現代経済は、市場経済と呼ばれることが多い。確かに、時代の変遷を三つの原理の重要性の変化として考えることは、大筋として正しいことであろう。しかし同時に、いつの時代にあってもこれら三つの要素が併存し、またそれぞれの要素も性格を変えている点にも注意を払わなければならない。例えば現代における国家は、少なくとも形式的には国民が主体となつたために元来の暴力的性格が薄れ（あるいは隠され）、またネーション・ステートと呼ばれる「想像の共同体」（※3）が生まれることで、かつての共同体における互酬機能が国家の再配分機能と融合することになったといえるだろう。

ここで話題を現代に戻して、資本主義と市場経済との関係、そしてそれらに関連する諸概念について、若干の整理をしておこう。市場経済を、市場における商品の交換が広汎に行き渡った経済であるとすれば、そこでは経済主体（個人・法人など）の個別的な所有権が確立されていることも当然のこととして想定される。一般的にいって資本主義は、こうした市場経済の部分集合と考えられているといってよいだろう。つまり、市場経済という広い海の一部（あるいは大部分）において自己拡大する利潤の自律的な動きが顕著であるとみなされる場合、そのような動きをさして資本主義と呼ぶことが多い。例えば、広く流布していると思われるある定義によれば、資本主義とは、資本として投下される資金の所有者（資本家）が、その資金によって生産に必要とされる諸資源あるいはその使用権を購入し、また自由な

労働者を雇い入れて、彼らに商品として販売されるべき物的財貨あるいはサービスを生産させるという形の企業経営による生産活動様式であるとされる。これは、工場における工業生産を念頭においたマルクス流の定義であるが、ここでは、多くの人間が労働者となって労働市場に売り手として参加しているという事実が重要である。現代に生きる私たちが、人生において市場という制度の圧力をもっとも強く感ずるのもこの局面であろう。もちろんこの点は多くの研究者が強調することであって、例えばポラニーは、1834年の中英における新救貧法成立をもって、彼のいう自己調整的市場システムの出現と考えた。

しかし②近年は、工業資本主義に基づく上のような資本主義の概念を少し拡張して使う例も増えたように思われる。これには、実在した社会主義体制の崩壊によって、実質的に資本主義が実行可能な唯一の経済体制と考えられるようになるとともに、かえって資本主義の多様性が認識されるようになったこと、また20世紀後半から21世紀にかけて、金融情報を含めた情報の生産と消費による新しい資本主義の姿が認識されるようになったことの結果と考えられる。さらには歴史学における研究の進展によって、従来は画期的な出来事と考えられた産業革命が、実は長い時間をかけた持続的な成長過程の一部と捉え直され、また賃労働がすでにいわゆる産業革命以前にも行き渡っていたことが明らかにされるなど、資本主義概念を歴史的にも地理的にも拡大することの妥当性が認められたことも関係していると思われる。最近の著作でいえば、例えば経済史家のユルゲン・コッカは、近年2世紀にわたる工業資本主義がもつ特別の意義を強調しつつも、資本主義の定義として(1)所有権および経済的意思決定が個人へと分散化・分権化されていること、(2)分業と貨幣経済に基づき、資源・生産物・機能・機会が商品化されていること、(3)将来における利益を追求するために現在における貯蓄と収益の投資・再投資がなされること、の三条件をあげている。ここには、マルクスのような資本と賃労働の対立などは、資本主義の要件と考えられていないのである。

こうして資本主義は、現代において広く受け入れられるようになったが、もちろんそれが批判にさらされていないわけではない。ここで改めて、経済を組織化する仕組みとしての資本主義が尊重される理由、そしてその逆に時として問題視される理由を考えてみよう。市場そして資本主義がもたらす最大の利点は、それが生産力の巨大な発展をもたらしてきたという点であろう。このような発展を生み出した原動力は、おそらく個人の利己心を全面的に開花させた人間相互の競争である。競争があればこそ、市場において価格メカニズムが働き、需給を一致させるように価格が決まる。その均衡価格は、資源の効率的な配分、すなわち社会的なコストの最小化を保証する。また生産者間の競争は絶えざる技術革新とその伝播を促し、社会的生産力を増大させる。こうした市場機構がもたらす利点に対する批判として、例えば、そうした理想的な状態がもたらされるためには、完全競争、情報の一様な共有、外部性の不在など、いわゆる「市場の失敗」のないことが条件となるが、そのような条件は実際

にはほとんど存在しない、と指摘されることがある。しかし、少なくとも資本主義が上に述べたような傾向をもっており、それだけでも十分な成果があがっていると考えることもできよう。実際のところ市場制度は、19世紀初頭から現在に至る時期において記録された人類史上未曾有の経済成長にあずかって大いに力があった。

市場制度の第二の利点として考えられるのは、それが現代における普遍的な価値とみなされる自由、(機会の)平等、民主主義といった諸観念と親和的であるという点である。市場制度が経済に広く行き渡った時期と、市民革命以後のいわゆる近代と呼ばれる時期が重なり合うのは、もちろん偶然ではない。伝統的なアンシャン・レジームにおける身分制の束縛に苦しんだ人間は、これらの政治経済両面にわたる変革によって、少なくとも形式的には、自由な主体として自立的な選択を行うことができるようになった。

以上二つの重要な利点に対して、市場制度および資本主義の否定的な側面にも触れておこう。第一に、市場制度の前提となる競争は、個人あるいは組織(企業)の能力や努力などに応じて、各経済主体に帰属する経済成果に差をもたらす。競争の勝者は、報酬の一部を投資に振り向けることによってさらなる勝利を得ることが可能であるのに対して、敗者はそうした投資を行う可能性を失う。さらに競争の勝者は、経済社会制度を変革する「構造的パワー」を得ることによって、分配の比率、税制、福祉、機会の不平等など人間の安全保障にかかる諸制度の構造を変える可能性を獲得する。これは、勝者の加速的な勝利を意味し、その累積的な帰結として格差はいっそう拡大する。こうした格差が固定化すると、敗者ばかりかそうでない人々にも社会的公正の確保に関する市場制度への疑念を生み出し、社会全体の不安定性を高める傾向が生じることになる。

第二の否定的側面は、市場制度が人間に、それ自体は目的でなく手段であるはずの貨幣蓄積を過度に重視させる傾向をもたらすことである。市場交換が経済活動のごく限られた一部に過ぎなかった紀元前4世紀のギリシャにおいてさえ、アリストテレスは商業活動を否定している。つまりアリストテレスは、「財産を取得する術」つまり経済活動を、オイコノミケー(家政術)とクレーマチスケー(取財術)に分類し、自給自足的な農業などの前者を自然なもの、すなわち正しいものとしたのに対し、商業や高利貸しなどの貨殖を目的とする後者を不自然なもの、すなわち不正なものとして斥けた。このような考え方は、西欧思想の歴史において一貫して存在している。アリストテレスの伝統を受け継ぐ中世の神学者トマス・アクィナスも、基本的に利潤や利子を否定し、その一部、例えば利得そのものが究極的目的となっていない場合などを例外的に認めているにすぎない。マルクスは冷静を装って剩余価値と搾取の理論を案出したが、その背後には資本主義を倫理的に糾弾しようとするパッションがあった。市場社会における利己心の解放を称賛したアダム・スミスでさえ、自身の結論を導き出す前提として、彼のいう「胸中の公平な観察者」の存在が人間行動の倫理的な歯止めとなると想定していたのであり、また市場経済化の結果生ずる、教育が閑却され視野が狭くなるという不都合にも十分留意していたのである。

私たちが、このような長所と短所をあわせもつ資本主義の現実を見つめ、あるいはその将

来を展望する場合にも、それを単なる市場システムとみなすのではなく、上で示した市場交換以外の互酬、再分配を含めた広い意味での経済体制の視点から考えることが重要だろう。

出典：斎藤修・栖原学「人間・市場・国家」、斎藤修・古川純子編『分水嶺にたつ市場と社会』、文眞堂、2020年、所収（一部改変）

### 注

※1 クロード・ルヴィ＝ストロース：フランスの人類学者。

※2 マックス・ウェーバー：ドイツの社会学者。

※3 「想像の共同体」：政治学者のベネディクト・アンダーソンは、ナショナリズムの起源と流行に関する著作『想像の共同体』の中で、ネーション・ステート（国民国家）を「想像の共同体」とあると論じた。

設問1 下線部①「このような単線的な市場の発展は、実際の人類史を正しく要約したものなのだろうか」という問い合わせに対して、筆者はどのような意見を持っていますか。筆者の意見を明記したうえで、筆者がそう考える理由を500字以内で説明しなさい。

設問2 下線部②について、なぜ「近年は、工業資本主義に基づく上のような資本主義の概念を少し拡張して使う」ようになったのか、かつての資本主義と拡張された資本主義の概念を説明しつつ、その理由を500字以内で述べなさい。

設問3 資本主義の長所と短所を指摘したうえで、資本主義の将来についてのあなた自身の展望を500字以内で述べなさい。